

一刀領談

本紙客員論説委員 下條正男



しもじょう・まさお 長野出身。国学院大学院博士課程修了。1999年から拓殖大教授を務め、昨年3月末で退官。現在は本紙客員論説委員のほか、島根県立大と東海大の客員教授。島根県の第5期竹島問題研究会の座長を務める竹島研究の第一人者。72歳。

本紙でも既に報じたが、

11月30日、島根県竹島問題研究会学校教育分科会の主催で「竹島問題に係る外務省と県内学生による意見交換会」が松江市内で開かれた。外務省からはアジア大洋州局北東アジア第一課の担当者。高校生は出雲高と隠岐高の生徒、大学生は島根県「竹島資料室」で学生解説員を務める島根県立大生と島根大生が参加した。

今回のテーマは「竹島問題をはじめとする領土問題について若者への普及・啓発を推進するために方策や学校教育の現状・課題などについて」。生徒学生の活動と国の取り組みを紹介する内容だった。

意見交換会から見たもの



竹島問題に関する学習活動について話す
学生11月30日、松江市内

竹島解決は政治の役割

ト上の書き込みでは、竹島問題の解決は外務省や島根県の仕事とするなど、人ごとのように捉えたものが多かった。

だが、国家主権に係る領土問題は本来、国会議員たちの仕事である。意見交換会の最後に発言した高校生が「竹島問題を解決するのは政治の力だ」と述べていたのが印象的だった。

意見交換会の4日前、韓国では日韓の国会議員らによる親善サッカー大会があった。韓国側の報道では、

後、仲間と学内で「竹島講座」を開くなどの活動を続けていたためである。

また「韓国の高校生と接するのも非常に重要」としたのは、隠岐高の生徒の場合、1年生の時から韓国語を学び、実際に韓国の高校と交流サイト(SNS)を用いてテレビ会議などを行っているから。それも竹島のような韓国側が敏感になる問題ではなく、隠岐諸島のジオパークを話題としながら交流を始めたという。

毎週土曜日に「竹島資料室」で来室者に対応する島根県立大生と島根大生の場合も何ら物おじることなく、自分の考えを発表することができるようになって

いた。これは資料室を訪れた県内外の人々との接触の中で育まれたものである。

出雲高と隠岐高の生徒もそうだが、学校の授業という枠組みを越え、自ら関心のある課題に持続的に取り組んできた結果である。それができたのは、竹島問題を目的とするのではなく、自分を育てる糧として、竹島問題を活用してきたからである。

意見交換会に参加した皆さんには、感情的に竹島問題を捉えることなく、知性的に対応しようとする秘められた熱意があった。

■島根県の仕事？

意見交換会に対し、ネッ

日本の議員が「今日の大会が日韓両国の新しい時代を開く始まりのピンポイントになると確信している」と発言したという。日韓の国会議員がサッカーに興じたからといって新しい時代は開かない。新しい時代を開くのは政治の仕事だ。

今の日本では、立法(国会)と行政(官公庁)の役割が見えていないのだから。今回の意見交換会に對して、ネット上では外務省批判が多く見られた。だが外務省の仕事は、国会が定めた方針を外交交渉の場で実現することである。

意見交換会から見えてきたものは多い。

■ 随時掲載 ■

■自分を育てる糧

意見交換会はマスコミ各社で報じられたため、ネット上で想定外の反応が見られた。「すぐく行動力があると思う」とした外務省担当者

だが、担当者が「すぐく

行動力がある」と評価したのは、出雲高と隠岐高の生徒の中に「竹島・北方領土を考える」中学生作文コンクールで入賞し、高校進学